

次世代・複合漁業経営への挑戦
～離島における経営モデルを目指して～

知夫村漁業協同組合
高 康

1. 地域の概要

私の暮らす知夫村は、島根県沖合に浮かぶ隠岐諸島の最南端に位置し（図1）、総面積は13.7km²、人口761人の小さな離島である。島には国の名勝天然記念物に指定されている絶景地「赤壁」（写真1）をはじめ人々を魅了する風景が点在し、観光名所として知られている。

2. 漁業の概要

知夫村漁協は組合員数350名（正：94名、准：256名）、主要な漁業種類は刺網及び採介藻であり（図2）、平成15年の水揚量は130t、水揚金額は約9千万円である。近年は新たな漁業としてイワガキ養殖が、県及び村とともにブランド化の推進に取り組んでいるところである。また、イワガキ養殖を軸とした新規就業者も増えつつあり、村の人口増加に寄与している。

3. 研究・実践活動課題選定の動機

私は小さい頃から漁師である父親の背中を追いかけて、将来は漁師になることを夢見ていた。地元の水産高校を卒業後、遠洋トロール船の乗組員となったが、不景気のあおりを受け1年で船を降りることとなった。その後、将来的には地元に戻るつもりで、都会を知るために大阪で職に就いた。数年のつもりで就いた都会の仕事であったが、今の漁師は食っていけないとの父親の反対から、幾つかの職を転々としながらやむなく都会で仕事を続けていた。そんな葛藤を抱いたまま13年の月日が過ぎたが、父親が体調を崩し、一人での操業が困難になったことをきっかけに、父親の反対を押し切り、平成13年10月に知夫村にUターンし、念願の漁師の道を歩むこととなった。

着業当初の2年間は県の新規漁業就業者自立支援事業による支援・研修を受けながら、父親とともに海に出ることで海の表情や漁場等を学んだ。研修期間が過ぎていくなか、今まで頭に描いていた「獲りだけの漁師」では収入が不安定なため現実的に限界があり、いかに安定的な漁業収入を得られるだけの操業計画を立てられるかが漁師として生きていくための条件であると肌で感じた。以前のように獲ればお金になる時代であれば、一つの漁業種類に特化し、海況や市況に左右され、先行きが不透明な経営形態で良かったのかもしれないが、魚価安・資源の減少が続く今の時代ではそれは通じない。そこで私は研修終了までの間このことを念頭に置き、周年を通じて漁業収入が得られるよう、数種類の漁業種類を計画的に複合した経営方針を打ち立てることとした。

複合経営における漁業種類を選択するうえで、まず経営の柱となるものを決めた。その条件としては、計画的な生産が可能で、かつ値崩れがおきにくく安定的な収入が見込める

ことであり、それには貝類養殖が一番であると考えた。図3に当面の年間操業計画を示した。養殖種として、高単価が期待できるアワビ養殖を中心に、補足的にイワガキ養殖をすることとし、その養殖作業の合間に漁船漁業としてかなぎ（アワビ・サザエ・ナマコ）、ヨコワ漕釣、ベニイカ樽流し及び刺網を複合的に組み合わせて行うこととした。

4. 研究・実践活動状況及び成果(効果)

平成15年10月、研修期間の終了とともに温めてきた複合経営を実践することとした。

(1. アワビ養殖) アワビ養殖については種苗生産から一貫して行うこととし、沿岸漁業改善資金を活用して海上養殖のための筏と種苗生産施設を整備した。筏には発泡スチロール製フロートではなく、環境に配慮した硬質樹脂製フロートを採用した(写真2)。アワビは出荷サイズに成長するまでに3年間を要し、当面は現金収入にはならないが、養殖サイクルが回るようになれば、安定した漁業収入につながる。初年度は栽培漁業センターからアワビ種苗1万5千個を購入したが、種苗生産技術を習得するためアワビの浮遊幼生を分けていただくとともに担当職員から技術指導を受けた。今年度は、夏場にかなぎ漁で確保しておいた親貝から採卵を行い、現在種苗生産に取り組んでいる最中である(写真3)。作業としては、給餌(周年)、籠換え(年2回)、親貝の確保(8月)、種苗生産(11月)、与える餌料は天然海藻としていることから、餌料が不足する夏期のための乾燥アラメ、ワカメの確保も行っている。また、平成18年からはこれらに出荷作業が加わる予定である。

(2. イワガキ養殖) イワガキ養殖については、村が生産支援策を実施している最中で養殖筏や作業場が整備されていたこともあり、設備投資することなく使用料を支払うことにより簡単に着手できた。イワガキ養殖は出荷まで3年間を要するものの、養殖中の手間が比較的少なく、複合経営にはうってつけである。この利点を活かし、Uターンしてすぐに種苗の購入だけはしておき、平成16年4～6月にかけて出荷した。この時期は刺網の漁期と重なるものの、日中はイワガキ、夕方は刺網と組み合わせることで複合可能である。カキ類の場合、人への健康被害の恐れがあることから衛生管理が非常に重要である。隠岐周辺海域は非常に清澄なため人へのそのような心配は少ないと思うが、より安全性を高めるため2週間に1度の大腸菌・ノロウイルス検査の実施、紫外線殺菌海水による20時間以上の浄化蓄養を行ったうえで出荷している。なお、出荷の規格外となるイワガキは7～11月の時化時に耳吊り作業を行っており、来シーズンの出荷に備えている。また、イワガキの種苗は県栽培漁業センターの人工生産種苗に依存しているが、今年から県の水産業改良普及員及び他のイワガキ生産者と協同して天然採苗を試みている。継続的にイワガキの成熟度及び浮遊幼生量を調査し、それらを目安に採苗器を投入し、種苗の確保に成功した(写真4、5)。この技術はまだ試験段階ではあるが、確立すれば種苗経費の節減が期待できる。

ところで、このイワガキは平成15年に島根県が認定した「しまね県産品ブランド」の一品に選ばれ、ブランド名「隠岐のいわがき」(写真6)として県をあげてブランド化を推進している最中である。生産者の役割は、「より良いものづくり」であり、私もこの一生産者であることを肝に銘じ、高品質なイワガキの生産に力を注いでいくつもりである。

(3. 漁船漁業) 最後に漁船漁業については、10月にヨコワ漕釣漁を行い、その漁期が終わればベニイカ樽流し漁を行っている。ヨコワは養殖クロマグロの稚魚として水産

会社が買い取りをしており、限られた量ではあるが高値で引き取ってくれる。ベニイカは単価こそ安いものの一杯当たりの重量があり効率が良い。そして、これらの漁期と養殖作業以外の時期はかなぎ漁を行っている。

このように安定的な貝類養殖と労働単価の良い漁船漁業を組み合わせることで、周年を通して計画的かつ安定的な漁業収入が見込め、生業として漁師が成り立つものと考えている。図4に私の暦年の水揚金額の実績と見込みを示した。アワビ、イワガキの本格出荷が始まれば、水揚金額における貝類養殖の割合が増加すると見込んでいる。将来的な目標としては、貝類養殖で年間500万円の水揚げを最低確保し、それに加えて漁船漁業で200万円程度の水揚げを見込んでいる。

5. 波及効果

ほとんどの漁村地域は過疎化・高齢化の問題を抱えているが、その原因の一つは漁業で生計を立てることが難しくなってきたことである。しかしながら、近年UIターナーの漁業就業は増えつつあり、ここ数年知夫村でも私を含めて5名が新規就業している（家族を含めると13名の人口増加に寄与）。これは漁村地域にとって非常に嬉しいことであるが、なかには漁業の理想だけを見て就業を希望するものも少なくない。これは昔から漁業が閉鎖的であり、中身が垣間見えない職業であるため仕方のないことなのかもしれない。雇われて漁業に従事するのであれば作業内容や収入の目途がつくであろうが、個人経営での漁業となるとそうはいかず、かといって、参考となるモデルもないのが現状である。私自身も着業して3年目であり、ベテランの域には程遠く成功しているとはまだいえないが、将来的にこの複合経営を成功させ、離島における漁業経営モデル漁業の一つとし、今後の漁業への就業促進のための材料にしていきたいと考えている。

6. 今後の課題や計画と問題点

当面の課題は平成18年に初出荷の予定であるアワビの販路開拓である。漁協出荷ではなく、島外の料理店等への営業活動を行い、観光シーズン（5～8月）や禁漁期（10～11月）を中心とした出荷体制を考えている。このアワビ養殖が軌道に乗ってくれば、給餌、籠換え作業等に費やす時間が増加し、操業計画を見直す必要が出てくると考えている。

このような技術的なことに加えてイベント等地域社会への積極的な参加も必要といえる。

ところで、新規就業にあたり県の新規漁業就業者自立支援事業による支援・研修の制度があり、非常に助かった。この事業は新規就業時の技術習得などをするものであるが、後継者不足に悩む漁村・新規就業を望むUIターナー希望者双方にとって極めて有用なものであり、行政には今後とも継続的な事業実施を望みたい。

以上、私が知夫村にUターンし、実践している内容を紹介したが、これからの漁業者に最も大切なことは計画性であると考えている。離島での漁業は漁獲物の輸送面等のハンディキャップも多々あるが、獲るだけの漁業から脱却し、安定した漁業収入を得ることのできるこの複合経営の実践により一人前の漁師となり、これからの後継者達のモデルとして「俺みたいな操業計画でやったらいいぞ」と、胸を張って言えるように頑張っていきたい。

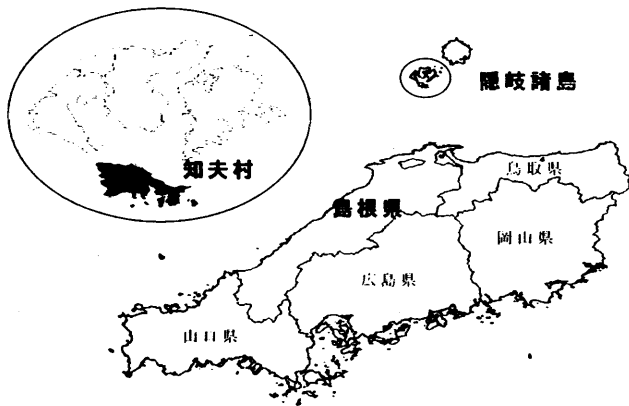


図1 知夫村の位置

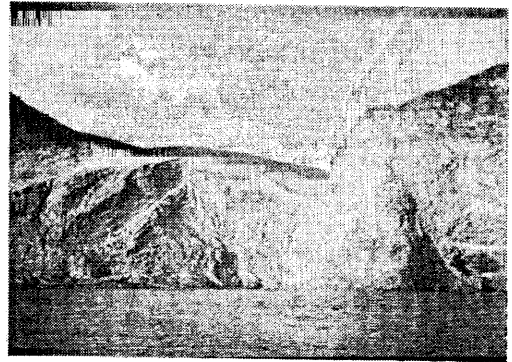


写真1 名勝天然記念物「赤壁」

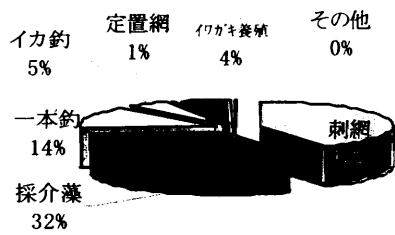


図2 知夫村漁協における漁業生産額の漁業種類別構成割合 (H15)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アワビ養殖	給餌、籠換え							親貝確保	給餌、籠換え		種苗生産	給餌
イワガキ養殖				上荷作業(日中)			耳吊り作業(時化時)					
刺網			夕方操業									
かなぎ												
ヨコワ漕釣												
ベニイサモチ												

■ : メインの漁業 □ : 合間の漁業

図3 年間操業計画

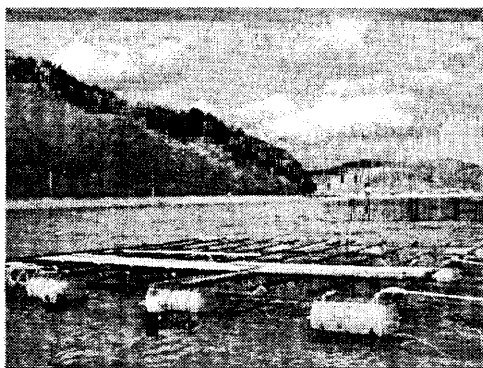


写真2 アワビ養殖筏

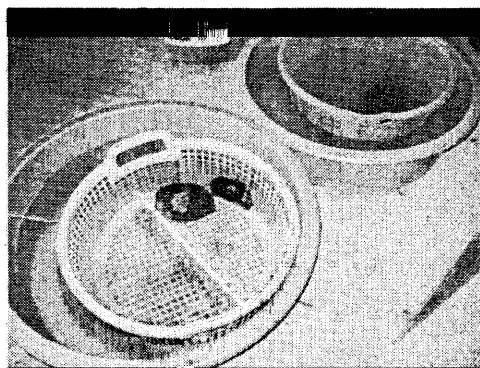


写真3 クロアワビの人工受精の様子

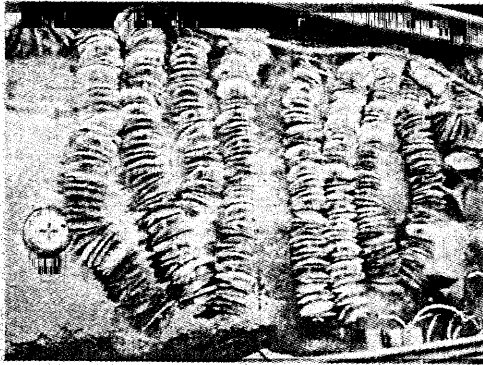


写真4 イワガキの採苗器



写真5 コレクターに付着したイワガキ



写真6 「隠岐のいわがき」パンフレット

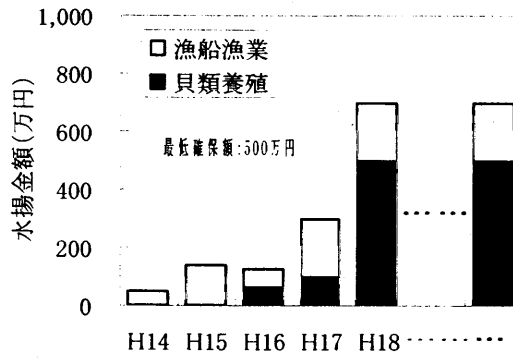


図4 水揚実績及び今後の見込み